



山正 LINE 公式アカウント友達募集中！

レイミーの AI 病害虫雑草診断アプリ



§1 イチゴ：育苗期の病害虫防除について

今年も猛暑が続く夏ですが、この時期はこの秋に定植するイチゴの育苗期にあたります。昔から「苗半作（なえはんさく）：苗の出来によって作柄の半分は決まる」と言われるよう、この時期に良い苗（健苗）を作っておくことが重要になります。今回は、育苗期に問題となる病害虫を取り上げます。

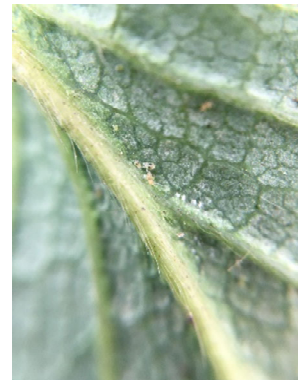
<炭疽病>：本病は、葉に斑点型病斑や、葉柄、ランナーに黒色陥没病斑を生じ、ク라운が侵されると、黒褐色に腐敗し萎凋枯死します。梅雨明けから発病が目立つようになり、夏季の高温・多湿によって発生します。本病は、健全に見える株にも感染していることが多く（潜在感染）、本圃定植後の保温開始後から発病することも多くあります。本病は降雨が感染を助長することから、親株期・育苗期は雨よけ栽培を基本とし、チューブ灌水で水はねしない管理をし、茎葉の濡れ時間が長ならないように灌水時間に注意が必要です。育苗ベンチ、資材の消毒を徹底し、親株や子苗が出来るだけ地面から離れた環境を作り、育苗ハウスに強風雨が振り込まないように管理を徹底し、雨除けハウスなどでは上部からの灌水は避けます。



<萎黄病>：本病の主な症状は、新葉の奇形（一部の小葉が小さくなり、舟形に巻く）や黄化で、症状が進むと枯死します。この病気は、苗伝染と土壌伝染の両方があり、親株での発生は子株に伝染するので、発生株を発見したら即座に除去し、発病親株からの採苗は行わないようにします。また、土壌からの伝染防止には、適正な土壌消毒を行う必要があります。

<うどんこ病>：糸状菌の1種による病害で、葉や果実が白色のカビで覆われます。乾燥、多湿のいずれの条件下でも発生しますが、多肥により軟弱徒長すると発生が多くなります。気温 20℃前後に活動が活発になり、圃場内に蔓延し、高温期は抑制されますが、5℃以下、35℃以上では発病しません。乾燥、多湿のいずれも好み、空気中での湿気で発芽し、乾燥したときに発病が目立つようになります。越夏し、夏季以降に分生子で圃場内に蔓延します。予防を徹底的に行うことが重要です。

<ハダニ類>：イチゴで発生するハダニ類は、主にナミハダニとカンザワハダニです。本害虫は、発生初期は主に葉裏に寄生して吸汁し、かすり状の白い斑点が生じます。密度が高くなると、葉縁が吐糸で覆われ、蜘蛛の巣状になることがあります。体長 0.5mmと微小で増殖力が高いため、初期発生での確認が難しく、防除適期を逃しやすいので、要注意です。本害虫の本舗での発生原因は、苗からの持ち込みが主で、親株期から育苗期にかけての徹底した防除対策が重要となります。



***イチゴ育苗期の山正の推奨薬剤ローテーション表があります。必要な方は、担当者までご連絡ください。ご説明にお伺いした上で、お渡し致します。**

§2 イネウンカ類の種類と特徴について

今年は虫の発生が多い年のようです。岐阜県病害虫防除所からは早々にカメムシ注意報が出されました。カメムシ類と同様に注意したいのが、ウンカ類であります。今月はイネ重要害虫あるウンカ類の種類とその防除薬剤についてご紹介します。

イネの重要害虫であるイネウンカ類:トビイロウンカ(*Nilaparvata lugens*)、セジロウンカ(*Sogatella furcifera*)、ヒメトビウンカ(*Laodelphax striatellus*)は、外見だけでなく、発生生態やイネへの被害状況についても特徴が異なります。

<トビイロウンカ> 日本で越冬はできませんが、梅雨時にジェット気流に乗り中国大陸から長翅型(移動型)が移動してきます。飛来数が少なくても増殖力が高く、イネの栽培時期を通して3世代ほど増殖し、第二世代や第三世代の幼虫や成虫(短翅型)はほとんど移動しない(定着型)ので、刈り取り間際に大発生するとイネを吸汁し枯死させます。



<セジロウンカ> 日本で越冬はできませんが、ベトナム北中部から中国南部を経由して、6~7月の梅雨時に南西風に乗って日本へ飛来します。飛来数は比較的多いのですが、1世代程度増殖すると水田から移出するため、吸汁による被害はほとんどありません。



<ヒメトビウンカ> イネ以外にもコムギやイネ科雑草などで生育し、日本全土で越冬することができます。そのため国内で生息するのは土着個体群が多く、吸汁による被害はほとんどありませんが、イネ縞葉枯病を媒介するため、保毒虫率(ウイルスを持つ個体の割合)が高い地域では注意が必要です。



<薬剤防除対策>

- 1) 育苗箱施用+本田防除: 予防としての箱剤施用に加え、移植後2カ月以降の増殖を抑えるために本田散布の実施も重要となります(特に7月中下旬の飛来時)。
- 2) 薬剤抵抗性への対策: ウンカ剤として販売されている薬剤でも、感受性の低下が懸念される薬剤(イミダクロプリド、フプロフェンジン)があり、新規の薬剤(トリフルメゾピリム、フルピリミン)の使用や系統の異なる薬剤の使用を検討します。
- 3) 防除適期: 飛来後1世代、2世代目の幼虫が発生する時期に行うことが重要です。実際の気温や周辺の環境条件により異なるので、病害虫防除所等からの情報を参考にします。
- 4) 薬剤散布方法: 本虫はイネの株元に生息しているので、株元まで薬剤が届くよう散布します。

ウンカ類 カメムシ類							
農薬名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用期間	本剤の使用回数	使用方法	農薬の使用回数
エミリアフロアブル	ウンカ類、ツマグロヨコバエ、カメムシ類	1000倍	60~150L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布 無人航空機による散布	3回以内
		250倍	250L/10a				
		8倍	0.8L/10a				
オーケストラフロアブル	ウンカ類幼虫、ツマグロヨコバエ幼虫	1000倍	60~150L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布 無人航空機による散布	3回以内
		200倍	25L/10a				
		16倍	1.6L/10a				
		8倍	0.8L/10a				
エクシードフロアブル	ウンカ類、ツマグロヨコバエ、カメムシ類	2000倍	60~150L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布 無人航空機による散布	3回以内
		500倍	25L/10a				
		16倍	0.8L/10a				
キラップフロアブル	ウンカ類、カメムシ類	500倍	25L/10a	収穫14日前まで	2回以内(は種時(直播)または移植時までの処理は1回)	散布 無人航空機による散布	2回以内
		1000~2000倍	60~200L/10a				
		8~16倍	0.8L/10a				